

我が研究生生活

―平安朝研究四十五年（三）―

山中 裕

前回、昭和四十年までの研究生生活を述べたことに続けて、今回は、昭和四十年前後より昭和五十六年まで、即ち史料編纂所定年までに歩んだ道について述べていただくこととしよう。

さて昭和四十年は、公務については、やはり『小右記』の校訂・出版を続けており、昭和四十二年には、助教授に就任（昭和四十年）してから初めて、『小右記 四』を出版した。桃裕行氏は、昭和四十年に編年部の部長として移られ、古記録第一部には、龍福義友氏が新たに入学して来られた。龍福氏は、東大の大学院を経て古代史・中世史を専門に研究を進めている優秀な新人であって、桃氏が移られて以降、私は龍福氏と二人で『小右記』を出版することとなった。そしてその二人で初めて完成したのが、この『小右記 四』である。十四年後輩の龍福氏と私と二人だけで『小右記』を研究・出版することに、私も初めは緊張した。こちらは助教授、龍福氏は大学院修了後まもない助手。本当はこちらが指導する立場にあるはずであったのだが、龍福氏はまことに優秀であって、『小右記』についても二人で相談すると、まことに私の方が教示に預ることが多かった。龍福氏は文学や哲学に対しても関心が深く、龍福氏との毎日の仕事はまことに楽しかった。

こうして、桃氏と離れて初めて龍福氏と二人で毎日の仕事をするようになって一年が経ち、やがて『小右記 四』が完成・出版されたのが、先に述べたように、昭和四十二年三月のこと。まことに嬉しかった。

こうして史料編纂所の私の生活は、新しい環境に入ったが、助教授になったばかりの時期は、何もかも新鮮な感じがし、張切って懸命に仕事をしたが、一面、あまりにも張切り過ぎて、かえってよくない面もあったのではないかと、今に及んで反省している。

さて昭和四十年には、論文に関しては、いくつか完成させることができた。昭和三十九年に、吉川弘文館が企画した雑誌『日本歴史』の特別号（一九四号）は、新訂増補国史大系の完成を祝する記念特集号であったが、これは国史大系に挙げられている多数の文献についての一つ一つの解題である。私に与えられたものは、『栄花物語』であって、そこでは、歴史物語としての栄花物語を中心に、諸本・題名・仮名の歴史書の現われる歴史情勢・源氏物語の影響・栄花物語の史書としての特徴等々に分けて執筆し、自分としては、ここに栄花物語の史書としての特徴をまとめあげることができたことは嬉しく、それなりに歴史物語に自身を持つことができた。そして昭和四十年の十月、『栄花物語 下』（日本古典文学大系）が出版され、岩波書店の日本古典文学大系本の『栄花物語』上下二冊を完成させることができたのである。

先輩松村博司氏の指導をうけながらそれを仕上げることはできたのは、ともかく嬉しかった。そして、いずれにしても、『栄花物語』は歴史物語として、『六国史』『新国史』以降、『愚管抄』にいたるまでの、史学史上、重要な存在であって、『栄花物語』を生涯研究していきたいとい

う決心をつけたのもこの頃のことである。

またこの年には、角田文衛氏が発表された「紫式部の本名」―藤原香子説（昭和三十八年）―に対して、それについての批判を『日本歴史』二〇一号にまとめた。紫式部の研究も、この頃から、より一層歴史学に近い感じで、文献的な論文が多く出されるようになっていった。

さて昭和四十一年は、公務に多忙であり、先述のように翌年が、龍福氏と共に、助教授になって初めての『小右記』を完成させなければならぬ年であった。原稿や校正を勤務時間中に史料編纂所で見ただけでは間に合わず、毎日・毎夜、我が家へ持ち帰って仕事を続けるといのが日常であった。これは史料編纂所に長年勤務中、出版の完成するときには必ずあることであって、何ヶ月かの間、このように我が家にまで仕事を持ち込んで進めるのが常であった。これは私のみのことではなく、その頃は、かなり多くの人が、そのようにしていたことは事実であって、いかに史料編纂所の仕事が大変であるかを物語る一面である。それほどまでする必要はないと言われれば、それまでなのだが、出版のよりよき完成を望む結果、このようにせざるを得なかったのである。

この時はかなり大変であったが、龍福氏が仕事をよく進めてくれたおかげで仕上げる事ができた。史料編纂所における初めての仕事を見事に成し遂げた龍福氏の実力を、この時明確に知ることができたのである。しかしこの時、私自身しみじみ感じたことは、今まで私が、いかに桃氏にもたれかかって仕事をしていたかであって、ここに初めて、自分が責任者となって仕事を完成することの、いかに大変であるかを知るに至ったのである。龍福氏にも迷惑をかけたのではないかと反省している次第

である。

さて再び、少し自分の研究のことに話を移そう。昭和四十三年には、秋山虔氏と二人の編集になる『日本文学の歴史3―宮廷サロンと才女』（角川書店）を完成させた。もちろん角川の企画による仕事であったが、秋山氏と二人で、たびたび角川書店の編集部を訪れ、計画を進めていった。この頃は、歴史物のこうした書物の出版ブームであり、前年には中央公論社による『日本の歴史』が完成したばかりであった。『日本の歴史』の売れ行きは未曾有のことであったといわれ、現在も「中公文庫」に収められて、なお売れているという。角川書店の『日本文学の歴史』は、歴史と文学とを併せたものを企画したのであったが、現在は絶版である。ただこれは、秋山氏と私が編集代表となって、大勢の人々の原稿を蒐集して編集したものであった。

さて昭和四十三年は、衆知のごとく学生紛争の年であった。東大に発した騒動は、多数の大学へと及び、未だ経験したことのない大きな社会事件となった。東大の中の各部局ともかなり荒らされ、史料編纂所の中にも、彼等若者の一部が侵入し、ガラスが数枚割れるなどの被害はあったが、さいわいに文書などの文献史料は無事であった。文学部の研究室の一部などはひどく荒らされ、本などに被害がでたところも少なかった。

この間は、仕事も思うようには進まず、大変な一年であった。したがってこの年は、個人の研究もあまりできず、「源氏物語の高麗人について」（森克己博士還暦記念会編『対外関係と社会経済』塙書房）を書いたのみであり、こうした紛争のさ中に、これを仕上げたのは、一つの

想い出ともなっている。

こうした大学紛争は、遂に東大の安田講堂などをもひどく荒らすに至ったが、翌四十四年には、なお小競り合いのようなものは多少残ったが、一応落ち着いていった。

昭和四十四年の四月に、私は教授に昇任した。思えば、史料編纂所は助手時代が長かった。もともと現在では昔と違って割合に早く助教授になれるようになったようであるが、我々の頃は助手の人数が極めて多く、まず助手を二十年やらねば助教授に昇任することはできなかったのである。したがって助手時代には、いつになったら助教授、さらには教授へ昇任することができのやら、考える程遠いような感じがしていたが、助教授に昇任（四十五歳）して以来、四年で教授に昇任（四十九歳）できたので、大変嬉しかった。

さて教授になったからには、史料編纂所の仕事はもちろんのこと、自分の研究についても更に頑張らなければと反省し、私自身も落ち着きを取り戻し、仕事も研究も立ち直っていった。

さて教授になったため、室を移動しなければならぬ。約二十年間住み続けた古記録部から移ることとなり、編年部の第一・二編と第三編とを私が担当することとなった。古記録部の方は、しばらく太田晶二郎氏が部長・室長となつて進められることとなったのである。

こうして私は久しぶりに編年部に戻つたわけであるが（昭和二十一年より二十三年まで、西岡虎之助・桃裕行両氏の下にいたことがある）、約二〇年ぶりに里帰りしてみると、もうすっかり様子が変わっていて、初めはなかなかその室になじむことができなかった。即ち、土田直鎮氏

が室長としており、室員もそこに長くいる人たちばかりであった。したがって新しく入った部室長である私は、何か落ち着かぬ椅子に座っているような状態にあった。新しく入った部室長は、その室の雰囲気に入り込むには暫く時間がかかったのである。

その頃の史料編纂所のしきたりとしては、教授が部長、助教授が室長といわれ、教授がその部の部長・室長を兼ねることもあった。この当時、一・二編は土田氏が助教授で室長であり、そして私は一・二・三編の部長となり、一・二・三編のすべてをみていかなければならなかった。

それまで一編は、林幹彌氏が主として仕事を進めてきており、さしあたって私は林氏と共にまずこの一編の仕事にとりかかった。林氏はこれ以前には、竹内理三教授や花田雄吉教授と共に一編の仕事に携わっており、一編の長年のベテラン的存在であった。

さてそこで私は、一編の仕事としてまず、源高明の伝記編纂の仕事にとりかかった。史料編纂所の各室には、一応の編年稿本というものが存在したが、源高明についてはそれがなく、元になるものが何もないという状態での出発であった。高明は有名な故実書である『西宮記』の著者つまり『西宮記』諸本の研究から始めなければならなかったのである。

前田家本・前田大永鈔本をはじめとして、九条家本、その他の諸本を校合して、それぞれの諸本の特質を調べねばならず、まだ活字本としてそれ程良い底本もない状況であったから（故実叢書本・史籍集覧本が、活字本としてはまずまずのものであった）、諸本の校異から始めなければならず、まことに大変な仕事であった。こうして一応、『西宮記』をはじめとして、高明の伝記史料を蒐集したが、その次の仕事として、

『大日本史料』の体裁にあわせて、これを配列・構成するという重要な作業を完成させなければならない。そこでまず自分なりに一応配列した後、これを編纂のベテランである太田晶二郎氏にお見せして、御指導を受けることとした。太田氏はこのとき、編年部の所属ではなかったが、面倒な顔もせられず、まことにこまやかに、文献の配列順序や構成について御教示してくださった。それは良き想い出であるとともに、故太田晶二郎氏に対して感謝の念に堪えない。その頃の史料編纂所には、自分よりも先輩の人があまりおられず、とくに古代史については、私より先輩は太田氏以外には一人もおられないという状況下で、古記録部から移ったばかりの私と、大ベテランである太田氏と二人で、編纂の、しかも高明の仕事に関わりをもつことができ、これだけの御厚恩をこうむったことは、忘れられない想い出なのである（『大日本史料』一編之十九、昭和四十九年完成）。また高明についてはかなり前から関心をもっていたため、ここで史料編纂所の仕事としてまとめ上げることができたのは、自分にとってまったく幸福という一語につきるものでもあった。

この間の、私個人の執筆について述べよう。まず吉川弘文館よりの『新訂増補国史大系解題』の分担がある。先述した雑誌『日本歴史』と同様の企画であったが、今回はそれをもっと大規模にした、単行本としての『国史大系』の解題である。『日本歴史』の場合と同じように、それぞれの文献、例えば『日本書紀』『続日本紀』という風に、「国史大系」に入っている主たる文献の一つ一つについて、約百枚程度の解題を叙述するという仕事であった。私に与えられたのは、『日本歴史』の時と同様に、『栄花物語』であった。

この企画は、国史大系文献解題として、上下二冊にて完成するはずであった。しかし中世以降の文献解題に当る下巻は、遂に原稿が集らず、出版できなかった。本書は坂本太郎博士・黒板昌夫両氏の責任編集であったが、坂本先生は、下巻を完成できなかったことを大変歎いておられた。ちなみに上巻中の歴史物語の解題については栄花物語と四鏡（大鏡・今鏡・水鏡・増鏡）とに分れており、前者を私、後者を阿部秋生氏が執筆された。

この当時の私の主な論文には、「源融考」（古代学一七―三）がある。これは、源融の伝記を一応述べ、賜姓源氏としての源融はどのような生涯を送ったかを論じたものである。

これまでは、藤原氏発展途上にある時期の公卿の中において、とかく源氏の公卿たちは、風流人にすぎず、政界で活躍するような人々はあまり見られないということがよく言われていた。しかし源融の生涯を見ると、決してそうではなく、当時の公卿社会の中で、時の摂政関白である藤原基経などと共に源融は、左大臣として、相当な見識をもった存在であったということを明らかにするとともに、宇多天皇の皇子としての賜姓源氏の意義の深さを述べたものであった。摂関政治のはじめの頃の、賜姓源氏の公卿の生き方の代表として自身のある源融に的をしぼって述べたのである。

この頃、私は賜姓源氏に興味をもっており、こうした論文としてまとめようとしたのも、先述したように当時の史料編纂所の仕事で、源高明の伝記を作成することにあつたからであった。

「源融考」は後に昭和四十七年、東大出版会より刊行した単行本『平

『安人物志』に収録した。また源高明については、だいぶ後のことであるが昭和五十八年に坂本太郎先生の頌寿記念論文集『日本史学論集』上巻に「源高明論」としてまとめ、これは思文閣出版より刊行した単行本『平安時代の古記録と貴族文化』（昭和六十三年）に収録している。

一方、こうしたこの頃の伝記史料に関する興味から、藤原氏の人々をも何人かとりあげ、それにより摂関政治の本質を明らかにしようとして、昭和四十七年には「藤原兼家論」（坂本太郎先生古稀記念『続日本古代史論集』下巻）を執筆している。これは後に『平安人物志』に収録している。兼家の生い立ちから薨去までを、細かに調査研究したものである。ここで論じた重要な点として、摂政の独立ということがある。兼家は、その外孫・懷仁親王即ち一条天皇即位の時、右大臣で摂政という地位についた。しかし兼家は、まもなく右大臣の方を辞して為光に譲り、摂政のみで強い權威をもつに至ったのである。こうした一条天皇の即位とともに摂政という官職が独立して大きな意義を持つようになったわけである。

一条天皇即位以前の花山天皇時代には、頼忠が関白・太政大臣であったが、その頼忠は、一条天皇の即位とともに関白を辞して太政大臣のみとなったため、兼家は頼忠から譲られた摂政を受けはしたものの、大臣としては右大臣であって地位が低い。といってもすぐに左大臣あるいは太政大臣になり得る見込みは、頼忠が生きている限りは立たないわけで、そこで兼家は遂に、摂政の独立ということを考えたのである。一条天皇は七歳で即位。幼帝にはその輔佐たる摂政が必須であり、遂にこれが機会に兼家は摂政を独立させたのである。

昭和四十九年になると、公務多忙という状態で、新たに論文を書くということはなかなかできなかった。そこで前々から気にかかっていた既往の論文を集成する単行本を完成することに懸命になった。今回の単行本完成には、学位請求論文とするという目的があった。これより先、恩師坂本太郎先生や先輩の井上光貞氏から、学位論文を提出せよと勧められていた。そこで思い切って今までの業績を主として、新たに書き下ろしの論文を加えて単行本にまとめてみる決心をしたのである。それが『平安朝文学の史的研究』である。これは吉川弘文館より出版。学位請求時には副論文として『平安人物志』（東京大学出版会）があった。これは先述の藤原兼家をはじめとして、嵯峨天皇・藤原道長、その他の人物の伝記を歴史を中心にあらゆる史料を蒐集して、昭和四十九年秋に仕上げたものである。こうして『平安朝文学の史的研究』が私の学位論文となった。

なお単行本については、二年前の昭和四十七年に、塙選書として『平安朝の年中行事』を完成している。塙選書は題目を自由に選ぶことができ、故中田剛直氏や中田易直氏の両名から、早く書くようにと前より勧められていた。しかし筆の遅い私はなかなか執筆に至らず、この時ようやく完成に至ったのである。塙選書としては、既に中村義雄氏の『平安朝の風俗と文学』があったが、その中では通過儀礼を主とする誕生より葬式までの儀式が、平安朝の儀式書を主たる材料としてまとめられている。そこで私は、それまで研究し続けていた年中行事・儀式に関する研究をまとめようと考え、「平安朝の年中行事」という題を選んだのである。こうした年中行事に関する研究はそれまで割合に少なく、江馬

務氏の『有職故実』、石村貞吉氏の『有職故実研究』などがある程度であったが、それらも文献史料をよく蒐集してまとめられているとはいえないものの、それらにまだとりいれられていない史料や文献があり、それを主として、国史・国文の両方の立場から年中行事・儀式の本質を明らかにしようと考えたのである。さらに、歴史の文献、とくに古記録を多く利用して、平安朝貴族社会と年中行事の関係をも明らかにしようと考えたものであった。しかしこの時は、結果として、まだ古記録類をそれほど所載することはできなかった。いずれ古記録類を主として、『西宮記』のような儀式書をも併せつつ、年中行事・儀式をまとめてみたいと、現在でもなお思っている。

また昭和四十九年における私的な研究としては、「源氏物語の準拠と史実」という一〇〇枚の原稿を仕上げている。これは阿部秋生氏の東大退官記念のための論文集である『源氏物語の研究』に、秋山虔・今井源衛・築島裕・野村精一・柳井繁氏等の親しい人々と共に原稿を依頼されて書いたもので、玉鬘十帖を中心に、その歴史的意義と物語としての準拠について述べた。常に源氏物語に関心の深かった私の今までの研究を確認できる機会であった。

こうしてみると、昭和四十七年から四十九年にかけては、私にとって久しぶりに小さな幸福の年であったと言えよう。昭和四十九年の三月には、『大日本史料』一編之十九が刊行され、その天元五年十二月十六日の条に「正二位前大宰権帥源高明薨ズ」との網文の下に、先述したように太田氏より御教示をうけた高明の伝記がまとめられている。『大日本史料』のこの冊は全部で三八七頁であるが、その二九八頁より

終りまで、約九〇頁に及ぶ部分が高明の伝記であった。『大日本史料』の伝記編纂の部分の史料配列の仕方は、まず最初に薨去の月日を挙げ、薨去の史実を語る第一史料から順々に並べていく。ついで誕生から死までの官職の昇進状況を次々に並べ、ついで系図により家系を明らかにし、その子および孫などを並べ、その著書など、高明の場合は音楽に関する史料をいくつか挙げた後、『西宮記』をはじめとした高明の著書を挙げ（『西宮記』には諸本が多く、先述したように前田家本をはじめとして、前田家大永鈔本など各諸本の目録も挙げ、それぞれの異同を説明し、諸本の奥書をも挙げている）、さらに『西宮左大臣御集』など和歌関係の史料を並べ、ついで邸宅などを挙げた後、最後に按文によって、高明の生涯の重要な事項を、『大日本史料』の一編のそれぞれの箇所挙げたところを示すというものである。

こうして源高明の伝記を仕上げ、『大日本史料』一編之十九は完了した。これは私が編年部へ移ってきた最初の仕事である。一編の室員でベテランの林幹彌氏（この時室員は林氏一人のみ）の頑張り仕事に對しての絶大な自信が、このように一編之十九を完全に仕上げさせたのである。

話が転々としたが、以上のように、昭和四十九年は、私にとって公私共に多忙な年ではあったが、自分ながら申すのも恥かしいが、仕事・研究共に頑張った年であったと思う。

さて昭和五十一年には、史料編纂所で再び編成替えがあり、私は、三編の部長になった。教授になってから編年部をこうして移り変わりののは、つらかったが、これも役所としての史料編纂所の一つの規定のよ

うなものであると考えれば仕方のないことであつた。三編というと、古くは吉村茂樹先生が長く編纂を続けられていた室であるが、吉村先生定年後は、史料編纂所全体の定員が少なかったため、一時やむを得ず閉鎖されていた室である。閉鎖にせざるを得ない事情が何であつたかはよく分らないが、とにかくどこかの一室を閉鎖せざるを得ないということになって、三編がそうだったのである。三編はしばらく閉鎖、四編はすべて完成しており、一編・二編・五編以下は従来通り編纂が続けているという状況にあつた。このように、私が古記録部から編年部へ移つた時は三編は閉鎖の状況にあつたのであるが、その後まもなく開室し、その三編の新しい仕事にとりかかつたのは土田直鎮助教・岡田隆夫助手の二人である。結局三編は、約一〇年目にして公開されたのである。

しかし公開まもない三編に、私が入つてしみじみ感じたことは、まだいろいろと完備していない室であるということであつた。新しい編纂に手をつけるということはとても困難な状況であつたが、三編之十九の出版が、もう目の前に予定として待っているのである。そこで私はまず、『大日本史料』の室備えの索引作成の仕事を始めたのである。そして索引を一冊作り上げ、編年の仕事にとりかかり、三編之十九を完成させた。これは、岡田隆夫氏の献身的努力によって完成出来たのである。

さてこの頃からの自分自身の研究では、昭和五十二年に「栄花物語と摂関政治―特に後宮を中心として」（『日本学士院紀要三四―三』）をまとめた。これも一二〇枚くらいの大作であつて、私としても相当に張切つて書いたものである。坂本先生の推薦で『日本学士院紀要』に執筆させていただいたものであつた。この年には、竹内理三博士の古稀記念論文

集である『統律令国家と貴族社会』（吉川弘文館）に『御堂関白記』と儀式行事」もまとめた（刊行は昭和五十三年一月）。こうして道長を中心に古記録、とくに『御堂関白記』と、『栄花物語』の研究にますます力を注ぐようになっていった。

『御堂関白記』について、ここでもう一度ふりかえてみよう。私の生涯のうち、『御堂関白記』は、まったく学生時代から縁の深いものであつた。卒業論文に「藤原道長」をとりあげ、道長の生涯を見つづ、摂関政治に多少なりともふれたものであつた。その頃、『御堂関白記』の活字本としては、まだ良いものがなく、卒業論文執筆時には、与謝野晶子・正宗敦夫両氏校訂の『日本古典全集』本を利用せざるをえなかつた。卒業論文提出以後も、道長や『御堂関白記』には深い関心をもっていたのであるが、それについての私の本当の意味での研究は、やはり史料編纂所入所以降のことである。昭和二十年の春に入所したものの、戦後しばらくの間はまだ、いろいろな整理に追われて本格的な出版は行われていなかったが、昭和二十三年より、古記録部において、先述したように、私は桃氏の指導の下に『大日本古記録』の最初の出版として『御堂関白記』を取り上げるよう決められたのである。これは私にとって大変光栄であつたが、また同時に荷の重い仕事でもあつた。しかし何とか勉強して成し遂げようと決心し、この上ない喜びをも感じたものである。

振り返ってみると、昭和二十年より二十三年までは、第二編で紫式部の伝記編纂をしばらく仕事としてさせてもらつていた。これについてはもうほとんど原稿が完成していたものの、そのまま出版できるといふほどまでには至つておらず、私の仕事は、原本当りと称する、原稿に挙げ

られている文献一つ一つについての、原本との校合である。最初の仕事が紫式部についてであったことは、私にとって頗る幸福なことであり、今でも私の研究分野が『源氏物語』と深い関係をもっているということは、少なからずこの時の影響があったのであろうと思う。

さて『大日本古記録』の『御堂関白記』三冊は、三冊連続で昭和二十六年～二十八年に出版された。毎年出版というのは本当に辛いことで、三冊目には索引も収めねばならず、かなり大勢の人を動員して仕上げる結果となった。これが古記録部の最初の出版であったが、この時の経験と反省から、毎年一冊という仕事は絶対不可能ということが分かり、その後、古記録部の『大日本古記録』の仕事は、同じ文献であっても、二年に一冊の出版と決められたのである。

繰り返し述べるが、この『御堂関白記』三冊連続出版はまことに辛かった。我ながら調べ不十分なまま出版せざるをえないという憂きこともあった。その後も、そうした部分がいくつに残っているような気がして、出版完成後も常に調べているうちに、『御堂関白記』が病みつきになつてしまったのである。そして一日のうちに『御堂関白記』を何頁か読む、あるいは『御堂関白記』に関することを調べることが毎日の日課のようになつていったのである。

さてそのような毎日を過ごしているうちに、昭和四十二年、平安博物館（現在の古代学研究所）の角田文衛氏が史料編纂所を訪れ、古記録の集中講義をやつてほしいと依頼された。私は大変嬉しく、直ちに承諾し、昭和四十三年の秋をはじめとして、毎回六日間の集中講義、『御堂関白記』の講読会に出かけるようになったのである。この頃は秋と夏との二

回、行っていたこともあったが、夏休みの時期の方が参加される人が多いため、途中から夏の一回とし、現在に至るまで毎年行っている。はじめは会に参加する人数も少なく、二十名以下のことも二、三年はあったが、しだいに人数も増え、活発な討論が行われるようになっていった。その結果、昭和五十年からはゼミ形式をとることとし、発表者を決め、それについて質問や討論を行い、私がそれをまとめるという方式をとるに至った。そして昭和五十一年より、その発表を原稿として、『御堂関白記』註釈」という形で『古代文化』に連載することとなり、今に及んでいるが、さらにそれを手を入れて、『御堂関白記全註釈』（最初、国書刊行会。後に高科書店）として出版している（今まで四冊刊行。なお続刊中）。

また昭和六十三年には、教育社新書の一冊として『藤原道長』を出版したが、道長については蒐集した史料もなお豊富にあり、今まで『平安人物志』その他に少しずつ述べてはきたものの、できればなおもう少し詳細に、あと一冊くらい書いてみたいと思っている。

さて『御堂関白記』の後に『大日本古記録』として出版したのは『九暦』である。『九暦』についても、『御堂関白記』同様、先号に述べたところであるが、それは公的な問題に限られていたため、今回は『九暦』についての私の研究についてここにまとめてみたいと思う。昭和五十三年、私は、井上光貞氏の還暦記念論文集『古代史論叢』下巻のために、『藤原師輔論』をまとめた。道長の祖父にあたる師輔は、村上天皇時代の天皇親政政治と、藤原摂関政治の発展にからむ重要な人物である。『九暦』を精読しつづもつとも強く感じたことは、兄の実頼が小野宮家

流の儀式作法を確立したのに対して、九条家流の儀式作法を確立した師輔の日記の重要性で、『九暦』の『別記』・『部類記』の完成と『九条年中行事』の成立との関係など、師輔の伝記研究とあわせて、その日記『九暦』と儀式との関係究明が大変大きな意味をもっている。こうして師輔の伝記研究を通して、有職故実や年中行事・儀式の意義をとらえることができるようになった。

これら年中行事・儀式研究の成果をとりいれて、自分の研究としてまとめたものに『年中行事の歴史学』『年中行事の文芸学』（いずれも昭和五十六年）がある。前者は遠藤元男氏と、後者は今井源衛氏と、それぞれ二人の編でまとめたものである。

この間もやはり『源氏物語』に関する研究は続けており、『源氏物語若菜の巻について―準拠と構成を中心として―』（上村悦子編『論叢王朝文学』笠間書院、昭和五十三年）など、一〇〇枚のものを書き上げている。

さて史料編纂所の定年も近づいてきたが、毎日出勤しては、こつこつと『大日本史料』第三編の編纂に励んだ。

この頃、新しく中央大学卒の石井正敏氏が我が三編に入所された。若い優秀な人で、それまで岡田隆夫氏と二人のみで仕事をしていたから、石井氏の入室はまことに有難かった。

こうして三編の編纂出版は、岡田・石井両氏の優秀な人材に支えられて、しばらく閉鎖されていたなどということは跡方もなくなり、しっかりと軌道にのっていったのである。これには私も部長として大変嬉しいことであった。

昭和五十六年三月、こうして長年編纂の仕事が続けてきた私も、ここに定年となったのである。

以上、昭和五十六年までの経過を述べてきたが、今回は、史料編纂所定年後の私について述べるつもりである。

（やまなか・ゆたか 調布学園短期大学教授）